
喪失

瑠璃色の墮天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喪失

【Nコード】

N4377J

【作者名】

瑠璃色の墮天使

【あらすじ】

ちよつとタイトル怪しいですけど、あまり変わりませんよ。

「ぶえっくしゅっ!!」

「うわ!? 汚いな・・・」

不満たらたらに、北川は俺のほうを睨み付けて来る。

ちょっと唾と鼻水を飛ばした位で怒るとは、心の狭い男である。

・・・誰でも怒るか。

「どうした。風邪でもひいたのか？」

「朝からくしゃみが止まらん。花粉症にでもかかったのかもしれんな」

机の上の教科書とノートを片付けながら、俺は鼻を一啜りする。

自慢ではないが、風邪の類には俺は縁の薄い体質のようである。

最後にかかったのは小学生、いや中学生の最初辺りだっただろうか？
記憶が曖昧だが、少なくともこの町に引っ越して以来一度もかかった事はない。

「夏に花粉って何だよ」

「アレルギーかな？」

「そんなデリケートな体質か、お前って」

教室の窓は全開に開いているのだが、自然の恩恵はまったく得られていない。

季節特有の厳しい陽射しがカーテン越しに差し込んできており、木々にとまる蝉の声がミンミン響いてくる。

「天気予報によると、今日は最高気温三十度超えるらしいぞ」

「本当か！？さすがは女と天気の情報に詳しい北川だ」

「……褒めてないだろう、お前」

「よく分かったな」

三十度を超える？

制服姿の我々に死ねというのか、お天道様は！

夏服とはいえ、冷房もかかっていない教室内に熱せられていては体力を奪われる。

「この辺は冬はあんなに寒いから、夏はもっと涼しいかと思っていたのにな」

俺の考えは完全に甘かった。

「北国とはいえ、夏は暑いに決まっているだろう。もっとも、期間的に短いけどな。」

暑くなるのが早ければ、寒くなるのもまた早い。土地柄って所だな」

「何にしても、暑い事には変わらないんだな」

「実も蓋もない言い方をすればそうなるな」

役に立たない男である。

もう少し会話に潤いを与える事はできないのだろうか。

「相沢が以前住んでいた所はどうだったんだ？」

興味でもあるのか、北川は席に座ったまま身を乗り出してくる。

俺が前にいた所か……

ここに来てからの日々が強烈だったせいか、もう以前の日々は霧に包まれたようにぼんやりしている。

「何ていうかな・・・蒸し暑かった印象があるな」

「うだる様な感じか」

「分かり易いけど、そんなもんだ。夏場なんて学校に行くのも体力使うぞ」

「それはこっちでも変わらないって。じっとしているだけで汗がふき出てくるよ」

男二人、顔をつき合わせて揃ってため息を吐いた。

どうやら暑さに弱いのは俺だけではないようだ。

ちなみに俺は寒いのも逃げてという、緩急温暖にうるさい男である。

「男二人揃って元気がないわね」

「うん？香里か・・・」

机に体を預けてしよげていると、呆れた様子で腕組みをしている香里の姿が視線に飛び込んでくる。

ん？脇に抱えている箱はいつたいなんだ？

「相沢君はともかく、北川君までぐったりしていてどうするのよ。四時間目、プールなんでしょう？今からそれだとばてるわよ」

キラッ！

「そうだよ、プールじゃないか！ふ、俺とした事が忘れていたぜ」

プール、なんて素晴らしい響きなのだろうか。

合法的に水の中で飛び込めて、暑さなんぞ吹っ飛ばせる輝かしいスポーツ。

「水泳」という競技を立案した創始者に、俺は今心から感謝しよう。

「随分張り切っているな、相沢」

「当たり前よ。俺がスイマーだという事実を知らんのか、貴様」

「何で俺が知ってるんだ、何で」

北川のつつこみはもつともだが、あえて無視する。

今の俺にはスカイブルーに彩られた水の表面しか見えなかった。

ふ、待っているよウォーターワールド。

俺がもうすぐ君の世界へ行くからな！

「・・・プールぐらいでここまで熱くなれる人を、私は初めて見たわ」

「相沢は色々な意味で特別だからな」

「こら、そこ！一般人から見下ろす哀れみの込めた目で俺を見るな！」

まったく失礼な面々である。

香里は俺の方をじっと見て、改めてため息を吐いた。

「あの娘はどうして相沢君を選んだのかしら・・・」

「うん？どういう意味だ？」

言っている事の意味が分からなかったので聞き返すと、香里は脇に抱えていた箱を差し出した。

突然突き出されたので恐る恐る受け取ると、それは可愛い布に包ま

れた四角い箱。

誰が見ても一目瞭然だが、弁当箱だった。

・・・・・・弁当箱!?

「ちゃんと残さず食べてよね」

香里は今まで見た事がないほどの優しい微笑を浮かべて、俺を見る。

こ、こ、これは・・・・・・

落ち着け、落ち着くんだ俺!

ひよつとすると罨だという可能性だってあるぞ!

手作り弁当を作ったから食べてと言っておいて、

弁当箱の中身は空っぽという恐るべき罨かもしれないじゃないか!

・・・でも重いよな、これ・・・・・・

明らかに内容量がぎっしり詰まっており、布からは心地いい温かさを感じる。

となると・・・これは本物か!?

本物のあの香里が作った弁当なのか!?

おお、周りのクラスメート、特に男達からの視線が熱いぜ。

こんなに注目されるのは、転校時以来初めてなのではないだろうか？

「なにいつ!？ちょっと待った!待った!」

黙ってられなくなったのか、北川が勢いよく乗り出してくる。

ふふふ、からかうチャンスだ。

「どうしたんだい、北川氏。僕はこれからお弁当を食べようと思っているのだが？」

「まだ二時間目終わった所だろうが!ってそれよりそ、そのお弁当・
・・・」

「はっはっは、見て分かるだろう。香里からの手作りお弁当だ」

「え? ちょ、ちょっと・・・」

「ガガーン!? な、なぜ相沢に・・・」

体全身を震わせてショックを受けている北川に、俺は会心の笑みで答えた。

「ううん？分からないのかい、坊や」

「誰が坊やだ！」

「人徳と言うやつだよ、じ・ん・と・く」

「ちょっと相沢君、あのね・・・」

「何も言わなくていい、香里。同情は彼に辛いだけだ」

鼻で笑うと、北川は悔しそうに地団太を踏んだ。

はっはっは、気持ちいい！気持ちよすぎるぞ！！

これが勝者のみに与えられる快感・・・ふ、なんて甘美なんだ。

余韻に浸っていると、香里は俺の前に立って机の上におかれている弁当箱をトントン叩いた。

「誰が私が作ったって言ったのよ、誰が」

『へ・・・？』

香里の思いもかけない言葉に、俺と北川は呆然と香里を見つめる。

「相沢君にっていうのは本当だけど、これは私じゃないわ。栞よ」

「栞から！？だ、だって……」

今までの事を思い出してみる。

今年の春に奇跡的に完治した栞と俺は休日によく二人で出かけたりしていた。

街中に限らず遠出をする機会も増えて、その度に栞はお弁当を作ってくれる。

俺は栞のそんな気持ちが嬉しくて、いつも残さずに食べきっていた。

ただ問題は以前の重箱ほどではないにせよ、内容量の詰まった大きな弁当を作ってくれる事であった。

自信作なんです、と笑顔でいつも差し出され、俺は腹一杯になるまで食べ尽くさなければいけなかったのだ。

ところが目の前にある弁当はいたって普通サイズ。

むしろ男が食べるには少々小さいとも言える大きさだ。

「ふふ、栞の作るお弁当はいつも大きいから困惑しているでしょう？」

あつさり見透かされて、俺は照れながら聞き返した。

「やっぱり承知済みか。栞、急にどうしたんだ？」

「うーん・・・答えてあげたいのは山々なんだけど、栞が怒るからやめておくわ。」

せっかくの手作りだもの。お楽しみについてことにしておいて」

そう話す香里の表情はとても楽しそうな、慈愛に満ちた表情をしていた。

栞との諍いもなくなり姉妹としての絆が強くなっているのに、俺は嬉しさを感じた。

「分かった。ありがたく食べるよ」

「ふう、びっくりした。栞ちゃんの弁当だったのか・・・」

話を聞いていた北川は安心したように胸をなでおろしている。

ふ、分かり易い奴め。

「当然でしょう。私が相沢君のために時間を割く訳ないじゃない」

「それもそうだな、はっはっは」

「お前、笑いすぎ！」

そこまで言われると、さすがの俺も傷つくぞ！まったく・・・

俺は仲良く話し始めた二人に苦笑して、窓から外の光景を見やっただけ。窓側の席は景色は悪くないものの冬が寒いし、夏は暑いといい所がない気がする。

しかしながら、俺はいつも席替えの度に窓際の席を希望していた。

かけがえのない思い出のために・・・へっへ・・・

「ぶあつくしゅっ！！スン、ズズ・・・」

くっそう、考え事も呑気にできないな。

昨日までは何ともなかったのだが、今日の朝目覚めてからこの有様である。

体調は特に問題はなく、頭痛も熱もないのだが、いかんせんクシャミと鼻は何とかならないのだろうか。

授業中に都合よく止まる筈がないので、先生に苦笑気味に指摘されるのだ。

注目されるこっちは恥ずかしすぎてたまらない。

「相沢君、風邪？」

「大した事はない。ちょっとくしゃみと鼻水がひどいだけだ」

「水泳なんて大丈夫なの？ 変に運動すると、悪化するわよ」

「俺もそう言ったんだけどな・・・」

心配してくれる気持ちはありがたいのだが、休む訳にはいかない。

この漫然と身体を蝕む暑さを吹き飛ばすには、適した冷たさのプールに身を浸す他はないのだ。

「大丈夫だって。

俺のみなぎる精神力にかかれば、風邪のばい菌なんぞ埃同然」

「うーん、だけど夏の風邪はお前には危ないと思うぞ」

「？ どういう事だ？」

どちらかと言えば、冬の風邪のほうが性質が悪い筈だ。

インフルエンザ等も最近跋扈して、悪影響を及ぼしていると聞く。

が北川はおろか、何故か香里まで含み笑いをしている事に気づき、俺は眉をひそめる。

「なんだ、なんだ？何かあるのか？」

「ほら、言うじゃない。夏風邪は・・・・・・・・」

「馬鹿にひく」

こ、こいつら息ぴったりで俺をからかいやがって！

完全に面白がっている二人に言い返そうとして、俺は再びくしゃみをした。

くそう、まあ昼には治るだろう・・・・・・・・

<後編に続く>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4377j/>

喪失

2010年10月15日22時14分発行